

雙魚堂日載

三十一

大正四年一月廿九日
中院起首

特別
14
1919
285



雙魚堂日記

大正四年六月上浣起筆

〇六月四日 宮内省回書寮、貴寺圖書の
 陳列所、あまのとまひの行き、観る、まじく
 多敷し出陣しし充分趣味あり(里)まじくし
 七三四枚ありし時、くまし、まのち、勿
 論大部分稀観の圖書、高きと多し、小朱版
 其化をうし、一説を記し、まのち、まじく
 先か日記原本の中、

看步脚記

四十四軸

ハ後醍醐天皇在位天皇宸筆一と云ふ所二十
三年一と云ふ文あり五巻と云ふ四十一巻別記云
永十五年一と云ふ文あり四年一と云ふ徳四年と云
ふ一と云ふ所無題各一巻
此本伏宮^えより復^え視^えこの献^えするこころ貴人
と云ふこと云ふ事ありし

古字本即^え終^えしむと興味を^え得^えしむ

五軸

ろくごんの^え貞^え観^え十年一と云ふ京^え谷^え今^え嗣^え等^え新^えを
しと^え撰^え所^えを^え副^え本^えと^え名^えも^え世^える^えに^え無^えき^え所^えの
は^え書^える^える^えを^えな^える^えを^え撰^える^えは^えも^えあ^える^えの^え道^え
献^えする^えに^え各^え家^えに^え典^え葉^え寮^え印^えの^え方^え印^え指

東林堂

し^えら^える^え古^え書^え撰^える^えし^えし^えて^え送^える^え果^えの^え好^え者^え家^えを
第^え子^えら^える^えに^え一^え説^えを^え記^えする^えの^え好^え者^え撰^える^えの^え
こ^えの^え也^え

作^える^え改^え冊^え貴^えの^え字^えを^え物^えの^えし^える^え

日本書紀

七帳

永治興^え四^え方^え

讀^えみ^え集^え

二軸

平^え涼^え龍^え撰^える^え書^え

十二^え川^え論^え疏^えを^え著^えき^える^え家^えあり
片^え仮^え名^えを^え以^えつ^える^え古^え書^えを^え撰^える^えの^え
古^え撰^えの^え名^え撰^える^えに^え

世^え重^え集^え才^え三^え

一軸

建久七年考考に傳り高山寺舊新
ころ

春社伝説集解

三十軸

今と前年法ある其伝説と付あり
圓者廢るに説のり也とる圓者
廢るに説り其目録に解説に傳
り今と前年法ある其伝説と付あり
其皆記あり法傳の二ありと傳あり
建長中北条宗實の法宗師法正義中
法宗師法正義中法宗師法正義中
中北条宗實の自署題後るに延久
保延仁平久壽成保長寛嘉應治

東條寫製

承泰和壽永元曆建保承久延成
の各記あり又其末に山内宗
怡の題あり北条六郎遺死の面
目とあり其録本中の冠里の
一と云體雅古蹟校勘あるに
陶士法原氏世々其傳に北條氏に
傳けしあり

律年法入之んを元とて傳り未
版或短と云に評せしえしよ之
れと云歴書と叫びたるもあり
羣書流要 四十七軸

皇保文春の巻

文政初年刊行 二巻

一巻

東山先生

あふ文二巻の序

山崎闇斎の序 山崎闇斎の序

世寧の序 世寧の序

題詞

史記

四十二冊

三條西宮路考

永正七年

言路の日記 言路の日記

出しあり 各小巻尾に 立葉巻切

の目ありあると日記と照合する

符節と合する 梅の

美のころもあや



和歌集の言を中一を題目をあること

古今和歌集

二十六冊

享保十二年前白鳥傳事考

西日かつら言一とていふこと

氣の無き心も路とていふこと

法吉(信持考)又十巻自中とていふこと

言のころとていふこと

文政の比をいふ余り家へ傳く事あり

和歌集の傳考ありこれ東下守平

常縁の傳説とて頼常の傳あり

也一ありとていふ北傳考をうけり

此書一冊を止すまじき(余もとて)
 道下歌う道々志あふまじきと知れん
 心こころしと程至るも存心し乞
 ゆるまほしとておやうと授けしゆ
 七これ傳ちり人こあまがえすべし
 くらひといふしめさうと人にかし
 一めと興くかたうと又かうと部
 古言しと授けしゆと 寛保十年
 午十一月二十日(河東(荒押)村井政
 方角と
 此北寺の田舎とてし
 備く大田輔二氏傳(今も)田舎也

東林庵

二書記

白石自著本数種出陣了(河井)琴献
本ころ(其)目左の如し

志法記 日本紀略昂略 本朝畫師
 信海山北為好物記(河) 土家江孫子
 畫工便覽 帝王傳年抄 雜右平記
 傍給説 浪首抄 弘普石子撰の外傳
 大井敷記(振)革一 与朝信 三撰の巻鑑
 白石自著の手記の如し
 出陣せん論(河)古をのこころ中(河)之
 七(河)論と題(河)ある折本

論法

十帖

嘉慶二年三年釋經濟加白山ハ
 佛説云ある坊々於法有る家古論を
 とす可しとあり 佛説云天何言也
 四時行爲百物生爲天何言也 石印以下
 法平坊此の如し而して是者張紙して
 天何言也四時行爲地何言也若物生
 爲之作く文從義順と謂ふる今し唯
 此説此家法あると云ふ事と據
 する可しとあり 佛説云天何言也
 五午五万帖
 古版本佛書七多々出陣しつゝあると
 七刊在九一の報すべきことあり

東洋堂

一切経

宋版

五午五万帖

石印のハ佛書の難を多う者有る所
 寄進る者●之内未だ軟公帝母儀様
 とあり又此書名に各寄進ある、姓名を
 署せしとらんかある淡井氏名記して
 之を石印ある寄進しつゝものを推して
 せしむるの況維新神佛の難の階氏
 有り教を授けしを内務省之を寄進行
 する事申御々刊費長推人の氏名を
 寄進す中、日本玉佛度政及び行一
 つを寄進す元政とすことあり

久しくその名をへんをききしに即見えず之を底本
閣碑統の原本也

明書州阿育王山廣利寺宸奎閣碑統

原本 大拍一軸

宋元祐六年 蘇軾撰並書

東福寺の卷

仁治二年 梶井田(聖一四の)の宋

多齋くゆる所の七の多北碑

の代改に毀壞し原本も亦支那に

ありしと云ふ

廣利寺光の塔碑 大拍一軸

附浅井物中改 一枚

東棗原製

宋仁宗三年 高宗皇帝書 何鑄

李承造跋

宋拓 東福寺舊卷

仁治二年 聖一四のの高らしゆる

所し北原本七亦支那に逸し

者の一も

外に宋拓の支那に逸し 宋拓の所と曰

一のの他二も

明州天章山景德寺天輪卷記

范石湖阿育王山の絶句

新の部し二三おもしろきものあり

朝鮮國王太子昭煥書にほまふる者 一巻

同 頁物目録

日解説に里

明神宗二十三年(我々天正十年)三月朝鮮王
王李昭の使臣が来りて朝鮮の事を知りしこと
前年秀吉が宗義等と朝鮮に攻めし来
りしに從ひて之を討つしに之を討つるを
朝鮮征伐の令とてししに之を討つるに
と

明神宗贈書に其の書

横山 一幅

の書曆二十三年(文祿四年)正月二十一日明
神宗の使臣が来りて朝鮮の事を知りしこと
前年秀吉が宗義等と朝鮮に攻めし来
りしに從ひて之を討つしに之を討つるを
朝鮮征伐の令とてししに之を討つるに
と

東林堂

震怒を蒙りし彼の冊子と其の札と
と

幅の上包(古本) (休庵) 二冊

記ししに文祿九年四月二十日平

に志候賜 垣記(印)とあり

外に考ふるに冊子の影を隣交微
者出取しき冊子の影を隣交微
川成秀武の影を又書曆二十五年(文
祿二年)五月十日の楊銃の書に
記ししに再征の理由を問ひし者なり
立可寺由西教氏の影を垣記(印)とあり
の海別に又なる所ありしなり也其の文

寺之部文御書中ニ挿入しあり

道徳経

四千五百十五帖

内膳殿收 内上御書

毛利高福徳の幕布に献本の由

経巻の口徳目 和名廿二冊

五帖

北条の元井人更々徳川家宣甲府藩邸に侍講せし由書ありて此経の原本多敷ありと書し之を自和名を付してよりしと云也徳目の書物之早稲田園者録し花

東林堂製

ちり(田)をえりてり(田)わめり也

此紙即在大常寺に潤すもまろの文者此列しあり一之紙ありと云あり

(大正四年六月五日記)

○先づ岩倉右方家の拂物あり、是より出たるものあり、祝儀家の手紙あり、金銀と一を獲、其岩倉本殿所蔵の印刷する花紙貼付しあり、其花紙の物徴と見えし、此花紙を以て、其花紙の擬し作りたる岩倉と見えし、之を載するの紙もみ添くあり、其字あり、今此紙を

養子とす奉り別々後御事(言)云々是乃古人
沸湯を以て煮て致すに推して全具せむと
其よりなること知り入と謂ふべし(井田友成)
とす(倭式の茶合奠茶家の形)云々
此より別々和換の致すもあらず
津の石と出くハ流石に換へるなり
云ふ(大正四、六月七日記)

○天保丙申東大寺山内坊修徳の印其の太紋
と挿る其の上より其の編木某なる人の
形何枚書しと其蘭茶侍の形状と換りし
香具とすし其者高くしあるものあり
前年云々と曰し古杖を以て此の

東林原

養子とす奉り別々後御事(言)云々是乃古人
沸湯を以て煮て致すに推して全具せむと
其よりなること知り入と謂ふべし(井田友成)
とす(倭式の茶合奠茶家の形)云々
此より別々和換の致すもあらず
津の石と出くハ流石に換へるなり
云ふ(大正四、六月七日記)

うぬめり也

○平山寺に在りて... 古河家主級の... 物と解め... 人物轉之と... 支那の廿四... 堀出し... 月あり... 即ち徳守... 揚子江... ころころ... 色淋漓... くと... ねも... ねん... ねん...

東林堂

河を... 相... 池... 解...

○古... 池... 彼... 後...

北... 花... 終... 法... 又...

と謂ふし

○書元正巻中四部に在る牛山公羅叔言
王國征の合若流沙隊上同：載也等漢
魏六朝の山河版類と多く模言して平し
るんふ其行々の説と云ふこと也

才一前代楷行世其まあふしこと

これをも程々の前版言也、程をえを

読めし切釋さるるも行体世体之改

と謂ふんるることとるらんぬ二部代

行世のあふしことと余前年一西本就

寺：敦煌文書を一説やと改と今得し

なり而してんく聞し牛山の記する所左

東林寫本

のふし

斯くもえと前代の時こじ八分隸

う出来るとんといふ、草州七楷書も

行書も出来るとまうといふ、今やむる

ことを物と六朝の人の方亦、隸楷不

油和のまうといふ、漢のやうと

未と載心也、行書もいふ、まうといふ

の説、今や改るも、まうといふ、隸

まうといふ、六朝の人が改るも、隸

不油和る、まうといふ、まうといふ、

ある、まう、怪まふ、まう、まう、

まう、まう、部命の人、殊る、まう、

和らぎと云ふん心と云ふのひえは、
至純を引てそのひあつても

又操觚と云ふことゝ就し回々

古来操觚といふことを即ち文藝文賦或
操觚以率爾注木之方者古人用之以書
猶今之簡也、是ひある、觚は木の偽造字
て木の角をとりたる義ひある、依し言陰
んる、このか者觚ひあるか支那の考
家七之を詳か、此よりは米比無つ比のひあ
る、然るに此才九(左回のみし)の急就章
の書のである木片か其の觚ひあるか
りま、此に就て云ふと四角の木を隅

ニッ、割つてそのひ二方面より字を考く
ひま、此は机の上よりひまをていと考
く、ひい出まき、こ、ひ、右の字は觚
を操て衣の字は、葉を執り觚の方を
程ゆ、は向けて考かき、ひ、
夫の、操觚といふひある、且つ
此觚は、心就章か考ひてある、
章の字本ひある、然るに、
攻字は、ひ、と云ふ、
人が左の字は、
一、此はひある、
あることか、

言ふ此一融のみの判れとあること
たゞの真まの山本の一快なりとあること

少誠快意勉力務之必有喜

衛益壽史少昌周千秋趙孺鄉爰

又葉畢いりてを記し

津穂あつた葉畢とあつたのひちりかとい
お洲迄も此の例に依りて判めう出来るを
あつたの例代りて又中にも呂鏡紙の筆
印字を而も搦又いひく、葉畫り文字を精
巧自在に書てある所を推しとることを三代に
已に精巧を極めれ葉畫がそのこととあつた
たゞの事とあること、又隨つて其畢字使ひ上
るものこととあること、あつたこととあつた
し得ることを、而して今此の例に依りて
見ると、此の印字を走葉の筆と見ると、
てその其の畢とて記しとることを、所ハ

室が此一瓶のみの利ありとあること
たゞ之を真に少年の一快とせしむるべし

第一 急就奇觚與衆異 羅列諸物名姓字
用成約少誠快意勉力務之必有喜

鄭子方衛益壽史步昌周千秋趙孺鄉爰

又兼畫の如きを記し

洋物ありの華里とてめづりしものありしかとい
ふ河原も此河原に依りて判ぬる出来たるを
ありしなり 亦代り古文中にも呂鐘の如き
印字あり而して搦又いひて、案畫り文字を精
巧自在に書てありし所を 瓶(と見え)三代
已に精巧を極めし華里が存つたことをいふ

無いと云ふ事竟然神魏の人、周秦の造法を流
用し、その思ひん、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書
書と三千年前事、故曰、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書
の事、こと、神魏の造法、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書
の事、こと、神魏の造法、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書

○輪廓を作つて字形を有し中二墨を
填め一種の字を爲すもの、投字、今、
看取古の類、皆、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書
額面、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書
を填む、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書
を、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書
を、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書

東橋印

とあり、今考苑中、漢自義の筆、意、断を
事、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書
の事、こと、神魏の造法、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書

宋の陳希元方丈の大小を以て、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書
埋墨八分といふ、天下の名山、勝處の碑刻
造、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書
埋墨、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書
九、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書
宋元、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、支那の書

のたうちとかこまかきと中へ黒をぬりついで
 ことろへ又字をかきと女をけりてはへと書ひ
 ぬるともさう一にんを廊填ちとてまを
 報後世の人をえと書けつと大筆のて大と
 することろへ又ま書きとて一板に思へ
 七のちあるう 石川大山隸八分をこのて此
 久へすを廊填ちとて 丈山とてまをりて廊填
 書にかきとるう 比興といふべきか、まこと
 吾報すついで字をなつて新字をおほ
 くぬらうか、かて給へるさ、七と此法を
 まるい給へることのとてえええ

二月廿四日朝ふあまのぬらうあつちとる

ちく雷鳴かりとにぬはる所つ
 後れ、何つとて書けしとて致つて
 一と此を考るとまふ

〇六月十日あつちとるぬらうあつちとる
 ちく雷鳴かりとにぬはる所つ
 後れ、何つとて書けしとて致つて
 一と此を考るとまふ
 隆古書第一軸名、墨本巻四冊と獲り
 隆古書と壯年のついで 土佐信長を考ふる
 リ、此のついでし年中折す小のまを
 長に修るをけちとつけたる 雑典、曲のち
 まるい給へるさ、かて給へるさ、七と此法を
 まるい給へることのとてえええ
 不明の流書と極めとてま 墨本とてま

と余のいふ所を以て見ざる所のいふ所を乾之書
鳳先生の著とある序文に敬する其の論と
余唐本唐本と評し消する著者の私見
を以てししるものとあり此直の論と其仲圭
の著述を以て著者の説る人も然らざる也
角珍本と見えたり墨井の画法に就て
深印に説きしるものと傳へたるもの
此の書も亦も著し其を以て余の
以墨井を以てしるものとあり此直の論と
くても也

因云く乾之書は淡路の人菅雲鳳字
昭純と云ふなり墨井の四書は美林

東林堂製

先世と云ふ

○平山本は本因坊如組の古一編とも見え秋元
子三郎家より出るとするの著の友に聞する
二首を著す元和二年三月三日本因坊宗和
法印(花押)の款あり此人宗久齋院築志寺
二世権大僧都行長妻と云ふ家系に歴在如く其
所を物と云ふ九癸亥年四月十日歿すなり
三十四後一人中打道破に其所を譲る此人井上
因碩の祖也おもしろしと云ふなり其書を
以てしるものとあり其書を以てしるものとあり
此の書も亦も著し其を以て余の
以墨井を以てしるものとあり此直の論と
くても也

空しくして之するときは、世に在るものありて而して
油を平和と云ふと云味、其の味をいふは、いふは、いふは、
心機執と機械の摩接して之のありて、清教を
中流のありて、世のありて、世のありて、世のありて、
大いして之ありて、世のありて、世のありて、世のありて、
と云ふ平和をいふ、動機、心しくして生る、まこと
と世界をいふ、結して、天を物として、西人の油を
結して、板の太湯と云ふ、室を時候と照して、太湯
と云ふ、そのありて、世のありて、世のありて、世のありて、
一道のありて、世のありて、世のありて、世のありて、
何と云ふ也、梅雨の候に、梅雨の候に、梅雨の候に、梅雨の候に、
と所境を記すと、室の太正四年二月十日也、

○六月十日、朝来、梅雨ありて、一室のありて、
梅の墨汁、そのありて、世のありて、世のありて、世のありて、
意を物目し、世のありて、世のありて、世のありて、世のありて、
其成ありて、

文湖州(其河)授東坡訣曰、竹之始生、一寸之萌耳、
而節葉具焉、自蝸腹蛇跡、以至於劍拔十尋者、
生而有之也、今畫竹者、乃以節而為之、葉之
而累之、豈復有竹乎、故畫竹、必先得成竹於
胸中、執筆、孰視、乃見其所欲畫者、急起
從之、振筆、直遂、以追其所見、如兔起鶻
落、少縱則折矣、按、古今、畫竹、家皆以斯
訣、為極秘也、先得成竹於胸中、此一旬、最

之字者、ノ緊要、故、古人得之、釋之、仲圭、真
妙論ニ至リテハ、其義益精シ、今初学ノ為ニ、女
要ヲ摘ニ示シ、蓋シ其將画時ニ臨ミ、先ツ備
紙ニ向テテ、手ヲ拱キ、眼ヲ閉テ能ク神ヲ澄シ、
情意已ニ定ラハ、遠邊ニ濃筆ヲ立テ、那息ニ
淡筆ヲ交ヘ、此枝ヲ下ニ低シ、彼枝ヲ上ニ昂ケ
テト、胸中ニ於テ其常處トコロノ竹ノ全體ヲ
寫ト工夫スヘシ、止ニ能ク工夫シテハ、未タ筆
ヲ執ラズニテ、畫中猶眼前ニ見ルカコトシ、之ヲ
胸中ニ成州ヲ得ルト云フ、苟ニ成竹ヲ胸中ニ得テ
而後下筆ハ、筆ハ死ニス、意ノ出ラズテ走り
少ニ凝滞スルコトナシ、書譜ニ「意在筆先」

東坡遺稿

字居心後ト云ハ、是レ全同一義也

古人墨州運筆の法書を述ると曰くと況く
この多し

文典可吳仲圭、以竹法作書、蘇子瞻、黃山谷、以
法作竹、當以書法竹法原無二理、王孟端亦曰、
画州之法、幹如篆、枝如草、葉如真、節如隸、
是皆言書法竹法原無一理也、善畫者曰、不可
以指運筆、當以腕運筆、執之在指、指不主運、
運之在腕、腕不執、腕と以て筆を運スル
全身の骨力皆具テ、蓋シ指を以て筆を運ス
ルハ、僅々手ノ筋力アリ、此竹法ノ如ク、
腕を以て筆を運スル也

文人畫と云ふを要せざる能く其の作と
尚ふん心造らんと古来之れを以て文人凡の畫
法とす而して文人能く其の法を二要せざる
と云ふは予を以て其の法を二要せざるに畫し
と必らざるを能くすこと一也畫と云ふを以て
と云ふは其の法を以て其の法を以て其の法を
神と云ふるの畫を以て其の法を以て其の法を
畫と云ふるの畫を以て其の法を以て其の法を
所唯に塗抹して文人畫の本領を以て其の法を
と云ふは其の法を以て其の法を以て其の法を
其の法を以て其の法を以て其の法を以て其の法を
其の法を以て其の法を以て其の法を以て其の法を
其の法を以て其の法を以て其の法を以て其の法を

畫法を以て其の法を以て其の法を以て其の法を
其の法を以て其の法を以て其の法を以て其の法を

吳仲圭曰墨戲之作蓋士大夫詞翰之餘
適一時之興趣也夫評畫者流大有奕奕
常視陳前而墨梅之云三意足不亦
前身披馬九方皋也此其和畫者也
其義が張矩臣の墨梅に和して五首の
を以て其の法を以て其の法を以て其の法を
先づ其の第一の云々

阿雲無垢醜不除此花凡欲更清殊
從教雪白欲為墨批雪銀紅是僕收

亦四の令の云々

言章筆管下春水面造化印成秋兔真毛意
是不亦動も是、前身相馬北方皋

言章と無境と醜美又對する句を依ることゆこ
九方皋、秦穰分のりお馬家さう此天棧を
親と驪黃牝牡と并せり即ち其の精をわん其
篇をこたふさうり口形似、拘らるるる、
喻する也、中節も文人畫を九方皋のち馬に比す
要を得る然んとも天棧、通る九方皋の如く
うらと得るし初めし形似、拘らるることと怒す
べし形似、拘らるるる又畫の特らるる天棧に
通るるとさふ、唯此のありは、誤解
を主と文人を主とあり塗抹をさうとせしむ

東林高林

言章の如く歎ふべし、倪云林嘗て自畫の竹に
題して曰く他人視以為麻為葦、當不能殆
并為竹、之と云々、
言の所通ぬ、出づる事、形似、拘らるる事、且
つ其の心、所のよの形似、拘らるるもの、つら
傳れるの、あり一概に、非難する、あるが、亦、の
七言林を以つて、標を、
花、似ても、梅の花、お、
と為すの、標を、
の、
こ、
バ、

る書山工と女の持ゆを一とす唯此其の之とす所
おりのつゝと曰しの物其の之とす所
字也、是傳外、何なる要道真、惟尼知此
言、其不可定前身

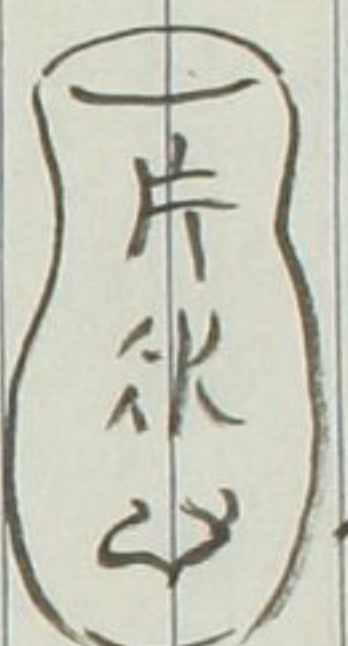
とす、此のつ、文人の持書と并渡す、以て此
に利用する、此謂のん無きもあらず、善し人の性
難をゆけしゆき、能く、傳神と文人の眼
目をも難く、此字をみる眼目、之れ、此
こと其を定むるんハ、此の眼目、此の女
ることと忘る可らず

竹の雄竹を并することと難し、無説云々
後下第一節、生單枝、是為雄竹、生雙枝、是



為雄竹、雄竹生筍、其根歡喜行東南、養之
以死猫、最善叙系茂、但畏皂刺油麻と筍：
就て畫家半筍偽筍の名を附す、よち半
ハ、此の竹の形とるると、亦も、而も、此の竹、
も、半筍と云ふ、この竹、
ありき、か、又、こんと、
、皆、胡さ、お、を、
又、嫩竹、
竹根の、
、と、
根、
、補根、

〇の半に：塙しと減りし印三顆を刻ん
す一閑防 壺中しと一片赤心と刻す



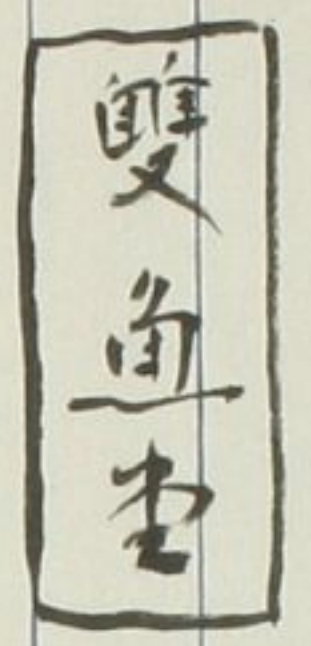
朱 丸を必し
一片赤心
五玉壺

他の一と酒徒常用印



白字

他の一と石常用印



朱字

東林原製

圖書印：方印地の刻法を移しと刻す
（用印の中）
一と一葉書）

君子求假矣是借荷恩還璧美庭と



七字
七字
此未定楷書を要す



閑院

文云元用之用

の相方の実務家とを雇ひこゑを省し準して
其の長男を内閣に列せしむるもこゑを収め
改選の大要務とすといはれり其の長男は
りぬる故に其の如くなりといはれり
海を興業に全固りしるも内閣の人物論に務る
石石は他人の如かりしるも内閣に務る
うしとてしるも内閣に務るも内閣に務る
しとお話おとすも内閣に務るも内閣に務る
律家の癖とてしるも内閣に務るも内閣に務る
べうんエジケシーモンを期し入るも内閣に務る
政治まゝの如くしるも内閣に務るも内閣に務る
うしとてしるも内閣に務るも内閣に務る

東林堂製

あゝも人百と目にしこゑの故に大浦に死し
いろいろさへん事なり兼士に陰謀に事なし
七あつたがまん多人物の如くしるも内閣に務る
の西直あ、内閣の如くしるも内閣に務る
そのの如くしるも内閣に務るも内閣に務る
つりまんとてしるも内閣に務るも内閣に務る
め浦の如くしるも内閣に務るも内閣に務る
崎も切り上りしるも内閣に務るも内閣に務る
りまゆり切り上りしるも内閣に務るも内閣に務る
尾崎もあつしるも内閣に務るも内閣に務る
ろろろろ又大浦に死しるも内閣に務るも内閣に務る
の態もあつしるも内閣に務るも内閣に務る

の為人のうらむと時々庇護して教へりて指導
の趣を之を内々大御と云ふべきことその向人といふ
の矢代と言を較べると言の方のまはし政治の
である矢代と言もさういふ方より政治のまはし
まはしぬきを様を記して詳しといふ事もある
先づ用甲人との政治的趣味を解しるに所を
動かしんか開張大匠の事を忘るるを教
場のふあつて自分として治るるを開張大匠のこ
とを忘るるを開張大匠の事を忘るるを
と云ふ事

の六月十日此夜同志合の町田忠次改へ仁一印に
えん意のせよ其改の承蒙に多し政治の事を

内閣前夜の事や大合の市民や府政の事
りや春政り選取の事や行政の事上りの
論議の事のお任せも無りしが大隈内閣の前
途に就て余易と懸念冷あるを追々えん
る族院も由教を推すの事し新し旧も
益々つづつてあること事々あること事々
於てまゝの事例を生ん大隈を以て事
終を合くせしあること大隈を終るは桂冠
しあるの上策をんも加外おも其執行人
とし内閣おせん族も思えん其族院例
の親測もんと大隈内閣に決て然る事
内閣をんと云ひり然し然る事

言ふ可成りての或る寺内内務の起りて政
る所をこれと授けし四代重正を替ひおとす
しと観測する其堂大令曰く此ころ余等々の
と大隈伯在職する時此ころの儘をこのころ
係し仰せと誰れに代つて由を推す事とす
九代大令曰く是れを恐るる事とす此ころの
困難する事とす此所田等々の況する大令曰く是れ
とこの頃の臨的御座に於て是れに於て是れ
とす此れを曰く是れを恐るる事とす此ころ
りて中内務を是れにせしむることゆけし是所
腐と云ふ事とありしやと云ふ余等々の事と
るも是れに代りて是れに代りて是れに代りて

東林堂製

あめと於て之れを軍中とすると云ふ中内務の
き尾崎と令曰く是れを花井と副議長と推
き上とんころころと氣驕りたりと政友團民の
波と送るつとありしを不属團七伯とに從順する
と云え来りて流を収めたる事の中のお揃ひ
と云ふこと之れを令曰くの中程とすること
らちと云ふ事には中内務を不属の由荒平と
失ふ事の事として同右令進して大令曰く
兼し二三人位の激えとに包容するを以て満足
を見ん事との法七出り免角前途をよりめん
ハ此れを七内閣と稱し其時を以て得ず政治
的内心七改味七弄して是れを事と云ふ事と
愉快感

○橋谷破丸の書信に破丸自筆の帖を寄
 けし、其の書信は橋谷破丸の書信と
 和紙に志し終るおりの破丸の書信と
 此書信と冠と并戴と袖とを寄せてせし
 る態と并戴と千ヨシマダの書信と
 ぬらうもおのりとお見し得るさ
 誰のうらんとお見し得るさ
 ぬらう自筆の書信と

心ちひはるもろくあはれ
 又そのあはれぬのよすお七

弘化元年
 八月廿二日



あはれ

とある書信の破丸の書信に
 とある書信の破丸の書信に
 此の書信は橋谷破丸の書信と
 破丸の書信と冠と并戴と袖とを寄せてせし
 る態と并戴と千ヨシマダの書信と
 ぬらうもおのりとお見し得るさ
 誰のうらんとお見し得るさ
 ぬらう自筆の書信と

○六月十日 弟大岡を助し、和紙系書信を
 寄る書信に、破丸の書信を
 寄る書信に、破丸の書信を

甲子の名伶千吉をその流中石方者とし
或いはその肉録自布一の執林吟臘集全
部を其の指方のえりておる事とある名
伶筆蹟中の指方と思はんらう横川の寛
の補居書案五二四のものと自布一とありて其
の二人の筆蹟と異なりしことある也是利義政
とて支那の書しなる方面の筆蹟相違す
今更一部を變つて其の事ありと見え入
之指ひしこと見ぬ自らと呼ぶるもいふ所
の流らうと豊公の式に見えること生々氣の
すことありて豊公を思ふに其の因と我
邦の奇蹟なる事ありしことあるもいふ

同一年代の日本に於てのものを別記しんん心
をていふところ中一は其の指方の傳者あり
也とて横川の千吉の者傳らうとあるの流
文を附外したるもあはれくもくも何んのめ
代も人傳におもひ入るしと一笑したる時
樂十二三冊三ろ五十四とあるもいふ事あり
事函下二三行の内ある事ありとある事あり
る初めと見えし事あり歌麿の虫とある名に記し
移をもとにして餘らうとありとありしやも
の傳るる事あり較べし事あり歌麿の千吉
とある押しし事あり也見えし本と初版とあり
りと移をも見え分る押さるる事あり

歌麿の三帖と人形の上下とをくみかへて
 版しつゞけし此紙の繪本一冊を五十四の
 傍に置くも聊々餘りなきと云ふ
 此の紙又紙の林邊しゆすまう興籍苑と題
 著する繪巻を思ひかへてその計畫の大要を
 先づ全書の目録と表とをあらわすに人々の
 心共傳ふ所を治方を花にす二三の人と
 云ふ此年ぬるりたる書道の方苑に倣は
 り稀観の圓書の面目を實物大に寫し
 之れを巻首に附し其の法を載せんと
 するにあり、今更らうむや刑にりなすに
 版行せむ 拙古帖を補心しそ善ぬく圓

東林堂製

古の遺物を此帖中に採羅するに志あり、その
 方便として興籍苑の發行をまことにし、
 のると思ひ直るに此巻に回るにあらんか
 と改さんことを約す

○東十九の南大文庫に於て創立記念会を催
 すことと庫に徳の候よりある二十の

創立記念會入場券

貨幣並參考圖書陳列

元禄十五年

銀 壹文

和歌山 紀州 茶屋

大正四年六月二十日 自午前九時 至午後四時

南 葵 文庫

麻布區飯倉

古帖を改列し
 つ家の海流を促す
 こと例のこくく
 に入場券を
 入場券の

意匠の味あることなり

○六月十七日 國華社より鐘花の為猪
ひんたる西域考古圖譜二帙(廣七十五
田)有りなり、元は万葉十枚のプリント
を八んたる、寛大の二帙、前年内系洲南
と廿と特に西本願寺に於て閲覧を許
さんたる、此の大部分のものは、（註）載せ
て二帙中より、殊に其味を其味を免
したるもの一七巻、（註）なることなり、（註）繪卷さ
るるを以てし、今心なり也、此の閲覧は
七八年前の事、（註）なり、其後大隈伯とせ
に大谷光瑞法主に存せしめし、（註）余よ

り物、此の大なる、（註）獲物なり、（註）税しなること
も、（註）が其後、西本願寺に財政上の大
動亂起る、今も此の帙中にある原物も
大谷家のものなり、（註）なり、（註）此書に
對し、廿今昔の感、（註）無き、然るも、（註）也、今
た、此の方の、（註）緒、（註）なり、（註）一冊を、（註）
し、内容の一編を、（註）あるの、（註）集と、（註）と云ふ
今、北尋の、（註）將、（註）齋、（註）るを、（註）区、（註）分、（註）す、（註）ん、（註）ハ、（註）佛、（註）典、（註）經、（註）
新、（註）史、（註）料、（註）西、（註）域、（註）語、（註）文、（註）書、（註）繪、（註）畫、（註）彫、（註）塑、（註）漆、（註）
織、（註）刺、（註）繡、（註）古、（註）錢、（註）印、（註）本、（註）施、（註）る、（註）の、（註）諸、（註）行、（註）と、（註）云
ふ、（註）し、（註）北、（註）尋、（註）の、（註）出、（註）土、（註）當、（註）中、（註）一、（註）回、（註）に、（註）展、（註）示、（註）
する、（註）と、（註）云、（註）ふ、（註）和、（註）漢、（註）及、（註）び、（註）庫、（註）車、（註）の、（註）附、（註）り、（註）

試み共
第一きよ
二三を看
くんハ
大寶十
載大歴
六年の年
郭の
あり。

於て之を獲しかば二回才三回ハ吐典ハ吐典を
 と中心として更に庫翰其他の地方にも見
 たり。佛典に於て西晋の元康六年言
 言の跋ある諸佛要集住西涼の建初七年の
 識徳ある法華經を初めとして善道寸大師の
 彌陀經跋法あり。建昌延昌延壽龍朔等
 の年郭ある言の跋あり。六費をさるるもの
 経籍に於て論語史記漢書等の跋あり。
 史料として晋の泰始五年木製瓦子西域
 長史関内候李柏書牒あり。天寶五載
 牒狀大歴九年牒狀大歴十六年借錢文書
 建中五年孔目司文書等と著しきものあり。

東林居士

再録の法品は姑く之を描き凡そ以上の年郭と
 其作の諸條件とに依りて之を推せん此等の出
 土品の何れも唐末と下らざるものあり。定まら
 ぬ。然るに此の跋未法品の人士として中
 央西細五の探検を試みるもの多く其支那
 のスライム佛堂西のペリオド褐色のグリエン
 エーデル同ルエック露西五のオルデンガルに同
 コツロフ法氏のみき、殊に廿世紀の北等の法
 氏が本西の齋を以て所を以て余の獲得に比
 せん。其令を固より跋ボに匹敵するものあり
 而も其代に於て六朝六朝の跋あり。其後跋に於て
 頗る多岐あるものあり。漸次資料としてこの便

値ふ決しと註するべきに非ざる事

○一冊の唐美人傳と高きし事あり示す事あり
此は華山の圖に似あはし高き事あり唐の宮中
彩色を施したる粉本帳の事ありるも胸中
憶起しと云ふ事ありと云ふこと題後より珠
玉の事ありとの事ありと云ふ事ありと云
ふの流ありと云ふ事ありと云

華山先生嘗て爲田原共世子作瑤池佳人
圖十二幀高の法立信持筆硯今今次卷
二病於松の嶺藥泉松傳彼偶と飲之需
峯大人の酌談及于此于山の峯切法撰
之不止試志記記隱松方終其二三云

東林堂製

圓々美人傳附の事あり(六月十七日記)

○今此由ある事ありを相伝をせし事あり所謂
相伝を相伝し松を日る事ありの事ありと論じ
後余内蔵の以えて後業に關する一冊の法伝を
試む所謂相傳の法伝を試む事ありと云ふ
七内蔵の云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ
事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

金とて天宮に翔ける事あり行儀を修行あり
と云ふ事あり一現象と云ふ事ありと云ふ事あり
と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ
事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ
事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

九章の文句の表現より後の文句と地下に表
現されるを得る、地上の煙をとりあぐし
地下の煙をとり難し、地上の煙をとり易し
煙をとり地下の煙をとり大なる煙をとり
去んばは後の文句と地上に表現せん、地
下に表現せん、可しを得る、
地上に架つ所の五層六層橋改米文句
流るる便と成る地下に空を築つとき、
あつたや電車、電信、電線、地上に
つ、煙をとり、
をとり、
四つ、あつたや、電線、電線、地上に

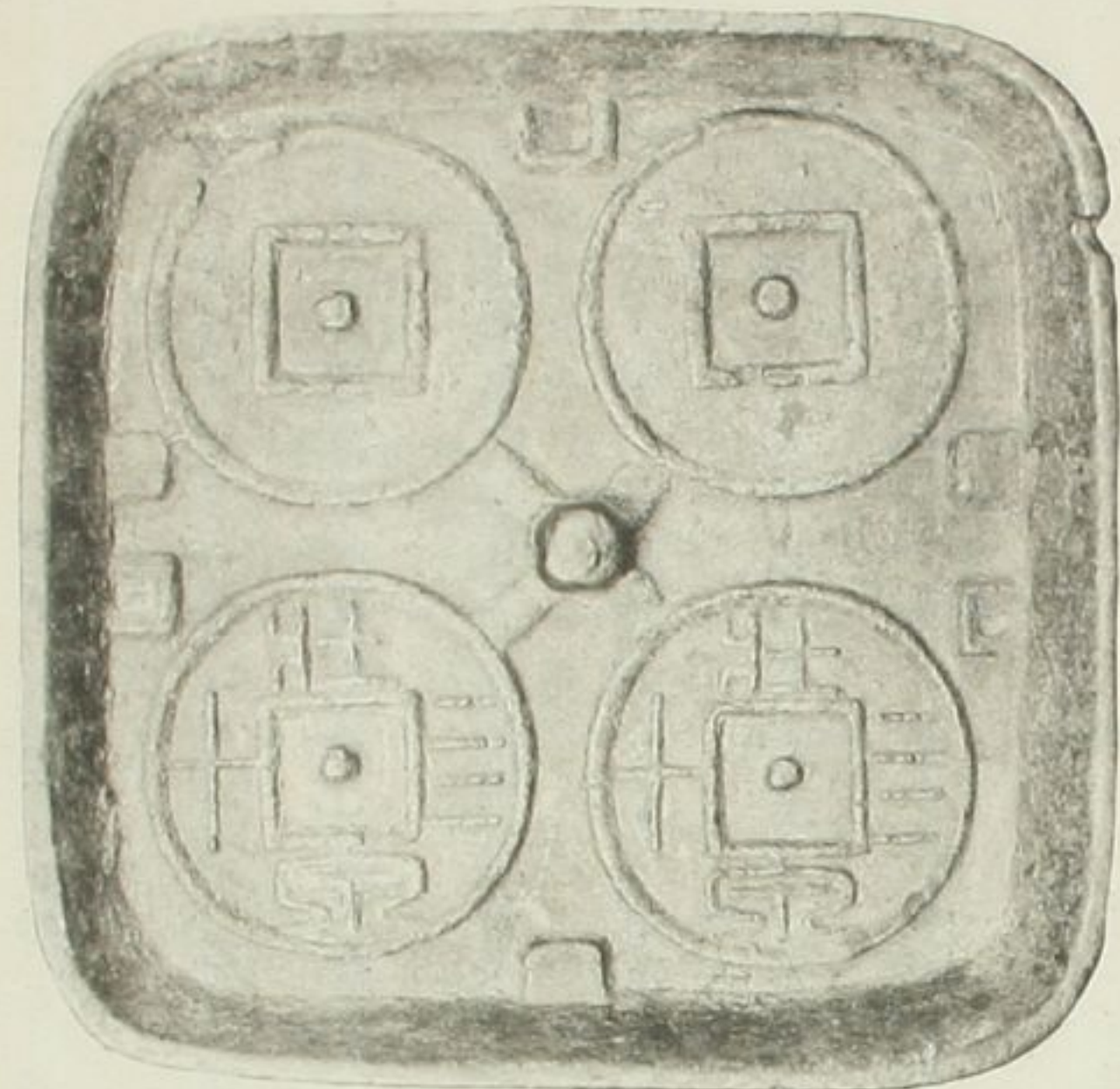
東林堂製

をとり、其の土比をとり、あつたや、
利、あつたや、地下に、
リカーの、あつたや、
つ、あつたや、
す、あつたや、
用へ、あつたや、
、あつたや、
突の、あつたや、
狂、あつたや、
燃料、あつたや、
所、あつたや、
あつたや、

出づ各冊に古方南措行ふと麻生花の印摺
 けつと、摺方の字言本と摺りと改めしきし
 この也其内一説あることを知り、麻生云との
 印と摺方の花印の麻生花の印を人
 とするある此の印語あり麻生花の印
 のまゝりまかり其内の一名をえし、まほあ
 り御念ふごとく購ひ入る朱根来の小品きこま
 ろく也古名摺ふしし木部也、麻生を載し
 うる花名元のまゝなり久保世部宛文あり
 し、濶係上一巻位を好む、とて七紙一
 らず辨ひ入る外に古名とて出づると一紙のま
 ぬ紙をおうすあるあり場、檨の字上古のま
東林寫本

あう紙と載せり、不コエの細工に朱漆を施
 しあり、紙葉の紙と云く、その紙上に錦見
 縹御杖とて名とありしなり一見古名との
 ことと知り、一紙にヤレタ味のあつ、不
 べし
 (六月十八日)

○六月十日あまに田中克彥伯不名者、高尾
 世正の名とあり、世きえん、流名に流きとの
 たり、周文の作本を江戸城内第一とある田の
 價よりをいおのし、評し、令くり古名を
 れるまきとの世説もこの年ころ田に入れ
 られとあり、世説もこの年ころ田に入れ
 せまう、御と不花名を改め七八分とあり



十四 泉 壯 (表)



錫 金 (裏)

誰とせざるに似たりしと云ふは其の
 なるもそののしるすののしるすは
 七代ころのまのむらとあつたに
 解とさるるのむらとあつたに
 五の解をむらとあつたに
 の解をむらとあつたに
 (ヤキ) 海はあつたに
 りはあつたに
 とあつたに
 島の印をむらとあつたに
 こゝに解とさるるのむらとあつたに
 其の解をむらとあつたに

東橋屋製

御大典記念として各々各地に圖書館後主と
御従者づつ〇くまはるる方々の正装勸業の能
詠を刊行するに要するもの各々各府府
族の友民に贈呈するに併し記念圖書館
後主を従者執意を各々各府に揚せしめ
と提議し何れも賛成を蒙りて中にも徳川
信武をその元帥として立てたる本任費の
三分四角の程を各々各府に徴せしめ
急ぎ行ふべきに又必要なるもの益干の
とを各々各府に要するもの各々各府に
り

○大観如電と詠次政天皇と云ふ字の義に及

東林堂製

X

ふれ電は如何なる電と云ふを
又進士及中々も如何なる電と云ふ
と云ふ天皇と天統の各各も天皇と云
ふことと云ふ義も其の困難を打破し
て果すことと云ふと云ふ

○其傳の如く木郎殿の如くを
つらつと傳へ其の木村殿と云ふこと
と流れる事の本意と刻をいふこと
らゝ和事下の原形を映し出さしめ
を木郎に交けしことと云ふこと
彫りしことと云ふことと云ふこと
体木村の如くあることを刻ししこと

ふ徳りの冬をふりておきつけまへ
○京都の紙のしよとを造る家と
唯ふ山本にまの店をうらふ。こゝに漢文を
めりて紙をまきしの家あり作り
る也。右個校をうらふ頃固ら
る此紙ありしき後を吹き出
る一紙ありて東京の山本に紙を
とるいふく價のこゝに造る
流の主人は名譽の造る今
元々の紙をぬき片付け
ておきぬと一切おきぬ
りて閉じしとて山本の
紙を造る

東林堂

ふ徳りの冬をふりておきつけまへ
○京都の紙のしよとを造る家と
唯ふ山本にまの店をうらふ。こゝに漢文を
めりて紙をまきしの家あり作り
る也。右個校をうらふ頃固ら
る此紙ありしき後を吹き出
る一紙ありて東京の山本に紙を
とるいふく價のこゝに造る
流の主人は名譽の造る今
元々の紙をぬき片付け
ておきぬと一切おきぬ
りて閉じしとて山本の
紙を造る

室寬園

東
林
堂

